



TITLE:

うたげのうた

AUTHOR(S):

川合, 康三

---

CITATION:

川合, 康三. うたげのうた. 中國文學報 1996, 53: 1-31

ISSUE DATE:

1996-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177618>

RIGHT:

## うたげのうた

川 合 康 三

京都大學

### 一 建安の公讌詩

#### (一) 公讌詩の「景」

「詩は志を言う」(『尚書』舜典)、「詩とは志の之く所なり」(『毛詩大序』)——中國では人の内面がことばとして外在化したものを詩とみなしたのに對して、西洋の詩學では詩とはミメーシス(mimesis)、すなわち外界をことばによつて寫し出したものと考えられた(アリストテレス『詩學』)。中國の傳統的な用語を借りれば、心情の表出は「情」、外界の描寫は「景」にあたる。詩の發生に關する初期の言述の中で、中國では「情」を、西洋では「景」を掲げたという對比が浮かび上がるが、しかし實際には詩が「景」「情」

うたげのうた(川合)

どちらか一方だけに偏することはありえず、中國の後代の詩論が「景情融合」を理想としたように、「景」と「情」とが分かちがたく結びついてこそ初めて詩たりうる、というよりも、詩を「景」か「情」かのいずれかに決めつけることはそもそもできない。

中國古典詩においては、「景」はまず「比興」として詩の中にあらわれた。すなわち外界の描出は外界を描くこと自体を目的とするのでなく、詩全體が表現したい中心となる事柄、人間にまつわる事態、それを伝えるための手段として用いられたのである。外界、その中でも自然の景物が他の何かをいうためでなく、景物の描寫そのものを目的として描かれるようになるのは、建安の公讌詩から始まるとふつう考えられている。たとえば南宋・范曄文『對牀夜語』は曹植の「公讌詩」について「之を讀めば猶お其の景を想見するごときなり」という<sup>(2)</sup>。書かれている光景が讀み手の目の前に浮かんでくるようにありありと再現されている——これは宋代の詩學の求めた二つの面、『六一詩話』が記す梅堯臣のよく知られたことばにいう「必ず能く寫しがたき

の景を狀して、目の前に在るが如くす」と「盡きざるの意を含みて、言外に見わす」、その前者に相當する外界の忠實な再現を、曹植の詩が達成していることを評價するのである。『對牀夜語』では續いて劉楨、王粲の「公讌詩」も舉げて、「皆な直ちに其の事を寫す。今人 力を畢し思いを竭すと雖も、到る能わざるなり」と、建安の公讌詩が外界をめぐりに寫し取っていることに賞賛を重ねている。<sup>(3)</sup>

最近では葛曉音氏が建安の公讌詩こそ山水詩形成の始まりであるとして、次のように述べている。「建安の公讌詩は、自然の景物を審美の對象として歌った最も早い詩編である」、「景物を寫す性格が比興言志から觀賞暢情へ轉換したことは、山水詩の形成過程における重要な契機である」<sup>(4)</sup>。すなわち、『詩經』『楚辭』においては景物はそれとは別のことを傳えるための手段として使われていたのが、建安の公讌詩に至ると景物そのものを觀賞したり、そこから快い感情を得たりするものとして、つまりは景物自體が表現の目的として詩に登場するに至ったというのである。

初めて特定の個人の手によって書かれ始めた建安の詩は、

これを中國古典詩の始まりといってもよいほどに、後世の詩が備えるに至る詩としての特徴が様々な面において最初に認められるものであるから、「景」の自立に關しても建安を嚆矢とすることは、いかにももっともと思われるのだが、ここでもう一度、公讌詩の「景」を検討してみよう。

『文選』卷二〇「公讌」の部類は、曹植の「公讌詩」から始まる。「公讌」という詩題はこの建安の時期に集中して見られたあとは消えてしまい、『文選』が「公讌」の部類を立てるほかは、のちに繼承されることがなかったのはなぜか、そもそも「公讌」とはふつういわれるように公卿の主催する宴會という意味でよいのか、まだ十分に納得できないところものこるが、とりあえず曹植の詩を見よう。

- 1 公子敬愛客 公子 客を敬愛し
- 2 終宴不知疲 宴を終うるまで疲れを知らず
- 3 清夜遊西園 清夜 西園に遊び
- 4 飛蓋相追隨 飛蓋 相追隨す
- 5 明月澄清景 明月 清景澄み
- 6 列宿正參差 列宿 正に參差たり

7 秋蘭被長坂 秋蘭 長坂を被<sup>おほ</sup>い

8 朱華冒綠池 朱華 綠池を冒<sup>おほ</sup>う

9 潛魚躍清波 潛魚は清波に躍り

10 好鳥鳴高枝 好鳥は高枝に鳴く

11 神飊接丹轂 神飊 丹轂に接し

12 輕輦隨風移 輕輦 風に隨いて移る

13 飄飄放志意 飄飄として志意を放ち

14 千秋長若斯 千秋も長えに斯<sup>か</sup>くの若くあれ

冒頭の二句、公子は賓客をうやまい、うたげの果てるまで疲れも知らずにもてなしに努める、というのは、同じく『文選』の「公讌」に收められている應瑒の「五官中郎將の建章臺の集いに待す」詩の中ほどにも「公子 客を敬愛し、樂しみ飲みて疲れを知らず」と、ほとんど同じかたちで見える。應瑒が「五官中郎將」、すなわち曹丕を「公子」と稱していることから、曹植の詩の「公子」も曹丕を指しているともみてよいだろう。<sup>(7)</sup> 類似の表現が重出することは、この句が招かれた客から主催者の接客ぶりを讃え、招待を感謝する儀禮的な慣用句として定着していたことを思わせ

うたげのうた(川合)

る。ここからすでに主人―客人という関係がこの場を支配していることが分かる。

續く三・四句で「西園」において園遊會が催されたことが説明されたあと、五句目から敘景に入る。明月はさやかな光が澄み映えて、空に居並ぶ星たちはあちこちで瞬いている。敘景は月と星の輝く夜空という、全體的な廣い景觀から始められる。月と星といえば、すぐ間近に曹操の「短歌行」のよく知られた句、「月明らかにして星稀れなり、烏雀南へ飛ぶ」がある。曹丕の「芙蓉池の作」(後出)では曹操より微細に、輝く月・星とそれを取り巻く雲とが作り出す光の變容を捉えているが、曹植のこの句では雲はなく、月はひたすらその清澄な光を注ぎ、星はその光を受けて参差――明るい星やほのかな星が入り交じっている、或いはまた一つの星自體も明るくなったり暗くなったりちらちら瞬いている、その兩方を含めて、星が點滅している光景を唱う。この句がそうした夜空の描寫以外の意味を含んでいるのかどうか、少なくともこの二句だけを見るかぎり、別の意味は卽座に讀みとれない。

續く七・八句は地上の景物を寫す。秋蘭の花が長いスロープを覆い盡くし、(はすの) 赤い花(李善注に「朱華は芙蓉なり」)が緑の池一面を埋めている。「蘭」は『楚辭』以來、徳高い人のシンボルであることは周知のとおりだが、しかしここではそうした寓意性は少なくとも直接にはあらわれていず、一面に咲き誇る蘭を捉えた敍景であると見てさしつかえないかに思われる。

池の水面を彩る蓮の花を赤と緑の補色關係で鮮やかに描いたあと、池の魚、木の鳥という園林の中の生き物へ敍景が移る。水の中の魚は清らかな波間に飛び跳ね、きれいな小鳥は高い枝からさえずる。魚も鳥もそれらのもちまえにふさわしい自在で活潑な行動をしている。「魚」が「躍」するのは、『詩經』「大雅」・「旱麓」の、

鳶飛戾天 鳶は飛びて天に戻り

魚躍于淵 魚は淵に躍る

の句に結びつく。この二句は『禮記』「中庸」にも引かれていてもので、「詩」に云う、鳶は飛びて天に戻り、魚は淵に躍す、と。其の上下察かなるを言うなり<sup>あき</sup>。その鄭玄

の注には「言うところは聖人の徳、天に至れば則ち鳶飛びて天に戻り、地に至れば則ち魚は淵に躍る。是れ其の天地に著名なるなり」。聖人の徳が上にも下にも廣く行き渡っているあらわれとして魚が跳躍し鳥が飛翔するのである。これは王先謙『詩三家義集疏』が指摘するように、鄭箋の解釋とは異なるもので、續く二句、

豈弟君子 豈弟たる君子

遐不作人 遐<sup>な</sup>ぞ人と作らざる

についても、鄭箋は「遐は遠也」と訓じているが、王先謙の引く『潛夫論』徳化篇に見えるこの章が「胡不作人」に作っているのに従えば、君子の徳が鳥や魚まで及び、ましてや人を感化しないわけではない、という意味になる。<sup>(9)</sup> 加納喜光氏は「遐ぞ人と作らざる」を大雅「棫樸」にも見える「人として在り續けるようにと祈り祝福する」定型句としたうえで、「旱麓」の篇全體を饗宴の歌であると説明している。<sup>(10)</sup> 鳶や魚の喜ばしげな動きは、饗宴の場で君子をこ<sup>10</sup>とほぐのに連續しているのである。建安の文人が用いる『詩經』が毛詩では通ぜず、齊詩、魯詩、韓詩などに依る

べき場合があることは、伊藤正文氏が逐一指摘しているが、曹植の「潛魚躍清波」の句も毛詩に縛られずに読めば、この宴席の喜ばしげな雰囲気を感じ立て、「君子」すなわち主催者の曹丕の稱揚へ続くものと解することができる。

では「好鳥 高枝に鳴く」の句はどうか。大雅「旱麓」では「鳶飛戾天」が對になっていたが、より直接に「鳥」が「鳴く」のは「小雅」・「伐木」の「伐木丁丁たり、鳥鳴くこと嚶嚶たり」と響き合う。毛詩の小序では「朋友故舊を燕するなり」、やはり饗宴の詩である。詩は鳥が仲間を求めてさえずるように、人も友を求めるものだ、と展開していく。そして魚も鳥も自在な行動をしようとする動物としてのちの時代にもしばしば對になるものであり、魚や鳥が本来の幸福な状態にあることがこの饗宴の雰囲気を用意する。すなわち鳥や魚はたまたまそこに實在した小動物として風景の一部を形成しているのではなく、うたげの祝祭的な雰囲気を作り出すのにふさわしいものとして配置されているのである。ここまでは外界の景物を描寫しているという以上の意味を汲み取れなかった詩も、この二句に至ると饗宴

うたげのうた（川合）

の舞臺裝置の役割を帯びていることが明らかに。

さらに次の二句、不思議な風が朱塗りの車に吹き寄せ、軽やかな車が風の吹くままに動きまわる。「神颿」の基づくところを文獻によって證することはできないが、魚、鳥の句の流れから推し量れば、ここにあらわれた風は天がこの饗宴を祝福するために吹き寄せたものではないだろうか。風は風雨となって人に苦難を与えるものでもあるが、また快さを與えるものともなる。その風に包まれて自在に、まるで空中を浮遊するかのように軽やかに車は動きまわり、快い運動感に身を委ねる。その車の動きに連動して、心も風とともに自由な、解放された状態に達する。「風が大空に舞い上がるように私は思いきり心を解き放つ。千年も萬年も永遠にこのようでありますように」。まわりの自然の祝福にくるまれて、人の精神も解放され、この至福の状態が永遠に持續してほしいという希求で詩は結ばれている。何焯『義門讀書記』卷四六が「結は謙に到り、亦た頌を以て之を終う」と記しているように、末句はうたげのもたらず陶酔感に浸っている状態をいうことによって饗宴を讀え

ている。このように詩の流れを追って全體を見れば、敘景は景物そのものを目的として描かれるというより、最後の高揚した状態を導くために周到に配置されているかに思われてくる。

建安の公讌詩からもう一首、劉楨の「公讌」(『文選』卷二〇)を取り上げてみよう。

- 1 永日行遊戲 永日 行きて遊戲し
- 2 歡樂猶未央 歡樂 猶お未央きず
- 3 遺思在玄夜 遺思 玄夜に在りて
- 4 相與復翱翔 相與に復た翱翔す
- 5 輦車飛素蓋 輦車 素蓋飛び
- 6 從者盈路傍 從者 路傍に盈つ
- 7 月出照園中 月出でて園中を照らし
- 8 珍木鬱蒼蒼 珍木 鬱として蒼蒼たり
- 9 清川過石渠 清川は石渠を過ぎ
- 10 流波爲魚防 流波は魚防を爲る
- 11 芙蓉散其華 芙蓉 其の華を散らし
- 12 菡萏溢金塘 菡萏 金塘に溢る

- 13 靈鳥宿水裔 靈鳥 水裔に宿り
- 14 仁獸遊飛梁 仁獸 飛梁に遊ぶ
- 15 華館寄流波 華館 流波を寄せ
- 16 豁達來風涼 豁達として風涼を來たす
- 17 生平未始聞 生平 未だ始めより聞かず
- 18 歌之安能詳 之を歌うも安ぞ能く詳らかにせん
- 19 投翰長歎息 翰を投げて長歎息す
- 20 綺麗不可忘 綺麗 忘るべからず

ひがな一日外で遊んでも、楽しみはまだ終わらない。遊び足りない思いが夜までのこり、仲間たちとまた鳥のように軽やかに飛びまわる。手押し車がその白い屋根を飛ばし、供まわりの者たちが道の脇にあふれる。——このように遊興の状況を説明したあと、第七句目から敘景に入る。

月がのぼってその光が庭園の中に射し込み、めずらかな樹木が青黒く鬱蒼としている。——庭園の光景がここでは時間の経過の中で織りなす光と闇の變化として捉えられている。月が庭を照らしだすことによって、光と影とが際立つ。黒々と影を成すのは「珍木」。張衡が宮中の庭園を描

き出して「奇樹珍果」といったように（『東京賦』）、日常的なありふれた木ではない。曹植の「公讌詩」には「好鳥」の語があつたが、のちに李白は「好鳥」と「珍木」を組み合わせてやはり宴にふさわしい光景を「好鳥 珍木に集まり、高才 華堂に列す」と唱っている（『敘舊贈江陽宰陸調詩』）。

清らかな川の水が石作りの水路を流れ過ぎていき、そこが波だつて魚が逃げるのをくい止めている。はすはその花瓣を散り落とし、落ちた花びらが黄金の池に溢れるばかり一面敷き詰めている。神祕の鳥が水際に宿り、仁獸が高くそびえる橋に遊ぶ。——仁獸は語義としては麒麟をいう（『公羊傳』哀公十四年に「麒麟なるものは仁獸なり」）。靈鳥・仁獸ということによって、敘景の即物性を離れて、現實を越えた世界が現出する。靈鳥、仁獸が周圍に集うことはこの場を祝福する道具立てにほかならない。李善が「美名を假りて以て之を言う」と注しているのは、靈鳥、仁獸が單なる「美名」であつて、詩句が指示しているものは現實の鳥であり獸であると注意しているのだが、李善がわざわざそ

うたげのうた（川合）

ういう注を記していることは、すでに靈鳥、仁獸をそのままの意味でとつて文脈を理解することができず、合理的解釋を補足せざるをえなくなつていたことを示している。詩の作られた現實の場を説明すればそうなるだろうが、詩を現實に還元する必要はなく、ことが直接意味しているとおりに靈鳥、仁獸がそこに群れ集うと理解すれば、それはたとえば『尚書』舜典に夔が音楽を奏すると「百獸率舞」するのと同じように、鳥獸までが人の喜びに合わせて謳歌するような至福の状況が喚起されることになる。

美しい館に波が押し寄せ、からりと開けて涼しい風がやってくる。水と風はいずれも涼をよぶ快いもの。次に引く王粲の「公讌詩」にも「涼風 蒸暑を撤し、清雲 炎暉を却く」とあるなど、建安の詩には暑さが過ぎて涼しくなる時節が人を快適にさせるものとして設定されているのが目立つ。

最後の四句は饗宴を頌して詩を結ぶ。このうたげのすばらしさはふだん聞いたこともないもの、歌つても詳しく述べ立てることはできない。筆を投げ捨てて長いため息をつ



くばかり。この美しさ、忘れることはできない。今まで聞いたこともないというのは、そのすばらしさを言うには違いないが、それはまたこの饗宴の非日常性を語るものでもある。それを一つ一つことに置き換えようとしても、自分の筆力では及びもつかないほどにすばらしい、と讀える。

曹植、劉楨の公讌詩には敘景の部分が中に含まれているが、それらの詩句はことば自體がもっている意味と別の指示對象をもつことはない、という點で寓意性はみられない。それゆえ従来いわれたように確かに敘景であるかに見える。しかしながらそこで唱われる景物は實際に周圍に存在した物というよりも、公讌という非日常的な時空にふさわしい、祝祭的な場を描き出すものとして機能している。一般に詩のなかの「景」といわれる要素は、のちの時代の詩の場合でも作品全體と合致するかたちで取り込まれているのである。公讌詩においては公讌の雰囲気や醸し出す舞臺裝置として描き出されているのである。

曹植と劉楨の「公讌詩」における敘景が忠實な景物描寫

であるかのように思われてきたのは、それが實際の外界の様子に相當接近しているためなのだが、王粲の「公讌詩」『文選』卷二〇)における外界の敘述は、より直截に祝福の意味を帯びている。

- 1 昊天降豐澤 昊天 豐澤を降し
- 2 百卉挺葳蕤 百卉 葳蕤を挺す
- 3 涼風撤蒸暑 涼風 蒸暑を撤し
- 4 清雲却炎暉 清雲 炎暉を却く

大空は豊かな恵みの雨を降らせ、それを受けて地上のありとあらゆる草木は若芽を伸ばす。涼しい風が吹いて蒸し暑さを追い拂い、秋の雲は夏の光を退却させる。――天の恩恵は植物にも人にも生氣を與える。これが單に天候や季節の變化をいうのでなく、饗宴の祝祭的な雰囲気を作り出していることはいうまでもない。慈雨や秋の到來が「我が賢主人」をことほぐのに連なるのである。外界の描出に關わるのは冒頭の四句のみであり、以下、宴席の模様が述べられ、この宴の主催者曹操(後述)を讀えることばで結ばれる。

『藝文類聚』卷三九、燕會に引かれる曹植の「太子の坐に待す」詩は宴會の敘述、主催者に對する贊美など、うたげのうたの要素を備えながらも、どこか不完全な印象を與える作品ではあるが、そこにも初めの四句に外界の様子が記されている。

1 白日曜青春 白日 青春にかがやき

2 時雨靜飛塵 時雨 飛塵を靜む

3 寒冰辟炎景 寒冰 炎景をしりぞけ

4 涼風飄我身 涼風 我が身をひるおす

黄節が「青春」について「陳思の此の詩は、夏日に作る。而るに青春と言う者は、雨後に日出で、愛すべきこと春の如きを謂うなり。亦た以て太子を喩う也。初學記に曰く、青宮、一に春宮と曰う。太子の宮也、と」というとおり、初句からすでに主催者への頌が連ねられているのであって、實際の外界の事物を寫しているわけではない。

王粲の「公讌詩」や曹植の「太子の坐に待す」詩に見られる外界の敘述が直截に饗宴の主催者に對する祝福につながっているのと比較してみると、先に掲げた曹植、劉楨の

「公讌詩」の景物描寫がそうした祝福予兆の意味を含みながらも、敍景としての性格がより強まっていることが理解できる。景物そのものを初めて描き出したといわれてきた建安の公讌詩は、饗宴という祝祭の時空をしつらえる面とそれが徐々に敍景そのものに變貌していく面とが混在しているかに見える。景物が饗宴を祝福する作用をするというのは、文學がまだ呪術的な性質をのこしていることを意味する。おそらく饗宴とは當時にあっては古代の祝祭としての呪術性を留めていたのであろう。それは日常を超越した特別な時空であり、外界は饗宴を祝福するものとして配置される。そして饗宴の主人公を頌することばで結ばれるところにも、参加者が主催者に對してことばを呈して祝福しようとする呪術的な面を見ることができる。それは列席する建安文人の小さな共同體の中で共有される世界であった。主催者に祝福のことばを捧げることは、そこから呪術性を希薄にすれば容易に儀禮的な、ないしは社交的な性格へ移行するものである。『文選』の公讌の部に收められた詩の中でも應瑒の「五官中郎將の建章臺の集いに待す」詩では

呪術的な面は消失し、「公子」曹丕の自分に對する處遇への感謝、不遇の身の自分をかくも鄭重に取り立ててくれたことへの思いが、己れの來し方を述べるという、個人の境遇を唱う詩に轉換している。詩が呪術的な色彩をのこしながらも、儀禮的、社交的な面、或いはまた個人の感慨を述べるなど、のちの詩がもつ性質へ移行していく過渡的な様相を公讌詩群の中に讀みとることができらるだろう。

## (二) うたげにおける主人の立場

『文選』卷二〇の「公讌」の部類には、曹植、王粲、劉楨の「公讌詩」と題する詩が並び、そのあとに應瑒の「五官中郎將の建章臺の集いに侍す」詩が載せられている。應瑒の詩だけが詩題に宴の主催者は曹丕、場所は建章臺であることを明示している。建章臺は漢の武帝が火災で消失した柏梁臺に代わって建てたもの（『漢書』武帝紀、太初元年）だが、ここで指しているのは鄴都にあったものに違いない。曹丕が五官中郎將に任じられたのは建安一六年（『三國志』卷一武帝紀）、劉楨、應瑒が疫病で死ぬのが建安二二年、詩

の制作時期はこの間に絞られる。陸侃如『中古文學繫年』では應瑒の詩を建安二一年の作と推測している。その前の三首の宴の實體は明示されず、たとえば『對牀夜語』などでは曹植、劉楨、王粲をみな同じ時の作とみなしているのだが、<sup>33</sup>嚴密に言えば同じ宴席とは限らないし、主人も曹丕のほかに曹操である場合も考えられる。應瑒の詩の「公子敬愛客」の公子は曹丕を指すこと明らかであるから、同じ句を用いる曹植の公讌詩も主人は曹丕とみなしてよいだろうが、王粲の「公讌詩」は曹操の宴席と考えられている。その「願わくは我が賢主人の、天と與に巍巍たるを享けんことを」の句に對して、李善は「主人とは太祖を謂うなり」と注す。<sup>34</sup>劉楨の「公讌詩」についても、五臣注劉良が「王粲と共に鄴宮においての作なり」というのに従えば、曹操の宴席ということになる。『文選』の四首のほかにも、『藝文類聚』卷三九「燕會」には、陳琳「宴會詩」、應瑒「公讌詩」が引かれ、『初學記』卷一四「饗讌」には阮瑀の詩がある。斷片も含めて十首近くのこる建安文人の饗宴の詩は、王粲、劉楨の「公讌詩」のように曹操が主催した宴も含む

だろうし、曹丕の宴の場合でも必ずしも同一の席とは限らないが、いずれにしろ曹操政權のもとに蝸集した文人たちが主君への忠誠をこめて頌した詩群であることは確かだ。それはのちに曹丕が「朝歌令吳質に與うる書」(『文選』卷四二)などの中で懐かしがった、文人どうしの友愛の場であったのである。

そうした建安文人の公讌詩群には、共通した特徴が認められる。それは文人たちが宴に招かれたことを主催者に對して感謝し、主催者をことごとくという要素が、程度に濃淡はあれ、いずれにも含まれていることである。酒席という日常とは異質の、はれの場において、天の祝福が主人に下されるように祈るのである。そうした呪術的な響きをのこすとともに、現實の立場を反映して饗宴への参加を許されたことを主催者に感謝したり、さらにまた王粲の「公讌詩」、應瑒の「五官中郎將の建章臺の集いに侍す」詩に顯著なように、自分が取り立ててもらったことへの感謝、それに酬いるために忠誠を盡くそうという意思が表白されていることもある。

うたげのうた(川合)

ところが、宴の主催者の詩は、列席する者たちの唱いぶりととはかなり異質な性格を帯びている。曹操の詩を見ることはできないが、曹丕の「芙蓉池の作」(『文選』卷二二)は主催者の立場から唱われたうたげのうたである。これは『文選』には「公讌」ではなく、「遊覽」の部に收められている。伊藤正文氏は「芙蓉池」とは「銅爵園」の別稱である「西園」の中にあり、これは曹植「公讌」・劉楨「公讌」・王粲「雜詩」などと同じ時に作られたものかという。<sup>59</sup>曹丕の詩の冒頭二句、「輦に乗りて 夜 行游し、逍遙して西園を歩む」という状況の説明は、曹植「公讌詩」の「清夜西園に遊び、飛蓋相追隨す」、劉楨「公讌詩」の「輦車素蓋を飛ばし、従者 路傍に盈つ」などの句と重なり合う。たとえ同一の饗宴とは限らないにしても、曹丕の「芙蓉池の作」も「西園」における遊興を、主催者の立場から唱ったものと考えて差し支えないだろう。

- 1 乘輦夜行游 輦に乗りて 夜 行游し
- 2 逍遙歩西園 逍遙して西園を歩む
- 3 雙渠相漑灌 雙渠 相漑灌し

- 4 嘉木繞通川 嘉木 通川を繞る
  - 5 卑枝拂羽蓋 卑枝 羽蓋を拂い
  - 6 脩條摩蒼天 脩條 蒼天を摩す
  - 7 驚風扶輪轂 驚風 輪轂を扶し
  - 8 飛鳥翔我前 飛鳥 我が前を翔る
  - 9 丹霞夾明月 丹霞 明月を夾み
  - 10 華星出雲間 華星 雲間より出ず
  - 11 上天垂光彩 上天 光彩を垂れ
  - 12 五色一何鮮 五色 一に何ぞ鮮やかなる
  - 13 壽命非松喬 壽命 松喬に非ざれば
  - 14 誰能得神仙 誰か能く神仙を得ん
  - 15 邀游快心意 邀游して心意を快くし
  - 16 保己終百年 己を保ちて百年を終えん
- 手引き車に乗って夜も出歩き、ゆったりと西の庭園を歩む。——「公讌詩」と同じく、庭園の散策から書き起こされる。二本の水路（とはどういう物か？）が池に水をそそぎ込み、美しい樹木が流水に圍まれている。ここから池の周囲の紋景に入るのだが、樹木をいうのに「嘉木」ということばを

使っている。「嘉」は好ましい性質をいう語には違いないが、それが形容することばは或る程度決まっているようで、このように樹木、また食べ物（嘉穀、嘉魚など）、人間（嘉賓、嘉友など）などと熟して用いられる。そこから推測されるのは、何か僥倖として與えられるようなめでたい、神に祝福されたもの、それゆえに人物についていえば立派な内實、徳を備えた人、ということであろうか。劉楨の「公讌詩」に「珍木」の語があったが、それと通じ合うところがある。景觀として審美的に捉えられた美しさというより、神の恩寵を感じさせるようなめずらかな木を意味している。木に靈的なものを感じ取って、そこに快さ（或いはそれが當時の美感だったか）を覺えるというのは、續く二句からも檢證される。

低い枝が乗っている車（の覆い）を拂い、長い枝は青空まで届きそうだ。嘉木に絞って敘述を進め、その低い枝は人と接觸する、高い枝は天と接觸する。一本の木が人と天との雙方に通じ、人界と天界との媒介となっている。木をこのように捉えるところが「嘉木」という聖なるしるしを

帯びているゆえんでもある。

さっと吹く風が車輪の軸に吹き寄せる。鳥が私の前を飛びかけていく。風と鳥、どちらも空を自在に駆けるもの、それが自分を中心に吹き寄せるものと飛び去っていくものと書き分けられている。風と鳥が並んでいることから兩者いずれも單なる外物としてのそれでなく、一種靈性を帯びたものとしての面を伴う。どちらも天に屬する存在であつて、それが人とこのようになかたちで交わるところに、大げさにいえば天の祝福を覺えるのだろうか。

赤く染まった雲が月と混じる。明るく輝く星が雲間からあらわれる。敘述は風と鳥から空へと移る。雲は月の光を受けて赤く染まり、星はその光を遮っていた雲から出る。月・星という輝くものとそのまわりで光を受けたり遮ったりする雲。それをリアルに描寫しようとする。この二句だけを見れば、それは實際の夜空の光景の描寫とも受け取ることができる。しかしそれに續いて次の二句がある。

天空は輝きを下に垂れ、その五色の色彩はなんと鮮やかなことか。九句・十句で述べた星・月の光が總體として光

うたげのうた（川合）

彩となり、天から下へ降り注ぐ。これは實景というよりヴィジョンを描いているというべきだ。神々しい、宗教性を帯びた莊嚴な光景。そこからさらに次の句が生まれる。

赤松子や王子喬のような長壽は望めない。仙人にはなれっこない。人の壽命の有限性に思い當たる。十一句・十二句でいわば宗教的啓示を受けたような、永遠につながる光景を記して、天界の美しさ、莊嚴さ、それに對比して自分の卑小さ、命の短さに思いが移る。地上に生きる自分たちのはかなさに思い當たつて、そこからいかに脱するか、詩人は思念する。

存分に楽しんで氣持ちを明るくし、體の養生に努めて一生を全うしよう。壽命の有限はいかんともしがたい。それゆえ與えられた命、そしてその最大可能な長さである百年、それを楽しく生きること、と詩を結ぶ。

このように見えてくると、外界を描寫した詩句があるものの、後代の敘景とはかなり趣が異なることが分かる。外界の或る種の物、それらの或る種のありかたを詩人は知覺しているのだが、そこに感取しているのは、人間をとりまく

世界の靈性であつて、人に美的快感を及ぼすような審美的價値とは異質のものである。

周圍の景物を後代のように審美觀に合致する美として受け取るのではなく、あたかも天が宴を祝福し、恩寵を與えてくれるかのような光景として享受する、神の祝福の顯現として外界を敘述していくという性格は、曹植、王粲、劉楨、そして曹丕の饗宴の詩に共通して認められる「景」の特徴である。そこから宴というものが、社交的な機能とともに、まだ古代の呪術性をのこしている、日常とは異質な時空として捉えられていたことが改めて了解される。

「景」が神さびた雰圍氣を盛り上げる助けとして描き出されているのは、饗宴の詩に共通するものの、曹植や劉楨ら列席者たちの詩ではその神々しい狀態がとわに續くことを願つて結ばれていたのに對して、宴の主人である曹丕の詩だけは、そこから人間の命の有限性を思うという悲觀的な情感が導き出されている。それが客と主人の間で鮮やかな對比を作り出す。招かれた賓客たちは、宴の至福の狀態が永遠に續き、天の加護が主人に與えられることを祈願す

るのに對して、主人の方は人の生命のはかなさを嘆く方向に向かつてしまふのである。

宴の中で悲觀的なことばを吐くというのは、建安詩に先立つ「古詩十九首」其四にも見られる。

今日良宴會 今日良宴會

歡樂難具陳 歡樂 具さには陳べ難し

彈箏奮逸響 箏を弾きて逸響を奮い

新聲妙入神 新聲 妙 神に入る

令德唱高言 令德 高言を唱う

識曲聽其眞 曲を識るもの其の眞を聽け

齊心同所願 心を齊しうして願う所を同じうするも

含意俱未申 意を含みて俱に未だ申せず

人生寄一世 人生 一世に寄す

奄忽若塵塵 奄忽たること 塵塵の若し

何不策高足 何ぞ高足に策ち

先據要路津 先ず要路の津に據らざる

無爲守窮賤 爲す無かれ窮賤を守り

轢軻長苦辛 轢軻 長えに苦辛するを

現世での快樂、欲望の追求、それに身をまかせて命のはかなさを忘れようというもので、古詩十九首の特徴の一つである虚無的な詠嘆が流れている。陸機が模擬した「擬今日良宴會」(『文選』卷三十)もほぼ同じ内容といつていい。饗宴という歡樂の頂點において悲哀を覺えるという心の動きはこのようにすでに用意されている。樂窮まれば哀生じるのモチーフである。

さかのほれば漢の武帝「秋風の辭 并びに序」(『文選』卷四五)にもそれは見られる。これが武帝を中心として家臣たちとの饗宴の場における作であることは、その「序」に説明されている。

上行幸河東、祠后土。顧視帝京欣然。中流與群臣飲燕。上歡甚。乃自作秋風辭曰、

上 河東に行幸し、后土を祠る。帝京を顧視して欣然たり。中流に群臣と與に飲燕す。上 歡ぶこと甚し。乃ち自ら秋風の辭を作りて曰く、

秋風起兮白雲飛 秋風起りて白雲飛び

草木黃落兮鴈南歸 草木黃落して鴈は南に歸る

うたげのうた(川合)

蘭有秀兮菊有芳 蘭に秀有り 菊に芳有り

攜佳人兮不能忘 佳人を攜えて忘る能わず

泛樓舳兮濟汾河 樓舳を泛かべて汾河を濟る

橫中流兮揚素波 中流を横ざりて素波を揚ぐ

簫鼓鳴兮發棹歌 簫鼓鳴りて棹歌發す

歡樂極兮哀情多 歡樂極まりて哀情多し

少壯幾時兮奈老何 少壯幾時ぞ老いを奈何せん

饗宴の樂しみのさなかにあつて、そこに悲哀を覺え、この喜びもつかの間のものであつてやがてうたげは果てる、そこから人の命の短さへと悲嘆が廣がつていく。ほかの「群臣」たちがどのような歌をうたったのか、或いはうたわなかったのか、これ以上のことは分からないが、主催者漢の武帝が喜悅の頂點において悲嘆のことを發しているのは確かである。「古詩十九首」は宴の主催者か否かも手がかりがないが、無名氏であれ個人の抒情のパターンとして、饗宴の中にあつて人生のはかなさを嘆くという感情の類型が用意されていたことは認められる。それが建安の公讌詩に至ると、饗宴の歡樂をうたう詩と歡樂極まったあと



の哀情をうたう詩とが、招かれた客と宴を催す主人との間ではっきりと役割が分擔されるのである。おそらくこの分擔には、詩が作られた儀禮的な場というものが作用したことであろう。招かれた客たちは、宴席の楽しさを唱い、主人をことほぐのが禮儀であり、悲哀のことばを吐くことは考えにくい。一方、主催者の方は、自分に向けられたことほぎに對する反作用として、この喜びもつかの間のものと、歡樂極まりて哀情多しの型に沿って、いわばお返しをするように、悲嘆を發したものであろうか。

『文選』の「公讌」の部類には建安文人に續いて、晉・陸機「皇太子 玄圃の宜猷堂に宴し令有りて詩を賦す」(四言)、陸雲「大將軍の讌會に命を被りて詩を作る」(四言)、應貞「晉武帝の華林園の集いの詩」(四言)、宋・謝瞻「九日 宋公の戲馬臺の集いに從いて孔令を送る詩」(五言)、范曄「樂遊にて詔に應ずる詩」(五言)、謝靈運「九日 宋公の戲馬臺の集いに從いて孔令を送る詩」(五言)、顏延之「詔に應じて曲水に讌して作る詩」(四言)、「皇太子の釋奠の會に作る詩」(四言)、梁・丘遲「宴に樂

遊苑に侍して張徐州を送る應詔詩」(五言)、沈約「詔に應じて樂遊苑に呂僧珍を餞る詩」(五言)が並ぶ。そこにはすでに饗宴の宗教性を帶びた至福感というものは乏しいけれども、天子なり皇太子なり、宴の主催者に對することほぎ、稱揚が敘述の大きな部分を占めている。陸機、陸雲の四言詩はほとんど晉王朝への頌といつていい。謝瞻、謝靈運の詩では重陽という秋の宴、しかも送別の席でもあつて、ややトーンが重く、隱棲への思いを唱つたりするが、そこにすら主催者への顯揚を挟むことを忘れていない。このように參會者たちは公讌詩の中で主人を讀めるのだが、『文選』には主催者の側からの詩が收められていないので、それに對してどう答えたか、曹丕以外に確認できない。

## 二 石崇「金谷詩序」

饗宴の席で作られる詩の中で、客人たちが宴のはなやぎをうたい、ことほぎのことばを主人に捧げるのに對して、主人の方は人生の短さを嘆くという主客對比の構造は、次の時代、西晉・石崇(二四九—三〇〇)の「金谷詩序」によ

って確かめることができる。石崇の「序」は『世説新語』品藻篇の「謝公（謝安）云う、金谷の中では蘇紹 最も勝ると。紹は是れ石崇の姉の夫、蘇則の孫、愉の子なり」の條の劉孝標の注に引かれている。

石崇金谷詩敘曰、「余以元康六年、從太僕卿出爲使持節、監青・徐諸軍事、征虜將軍。有別廬在河南縣界金谷澗中、或高或下、有清泉茂林、衆果竹柏、藥草之屬、莫不畢備。又有水碓・魚池・土窟、其爲娛目歡心之物備矣。時征西大將軍祭酒王詡當還長安、余與衆賢共送往澗中、晝夜遊宴、屢遷其坐。或登高臨下、或列坐水濱。時琴瑟笙筑、合載車中、道路並作。及住、令與鼓吹遞奏。遂各賦詩、以敘中懷。或不能者、罰酒三斗。感性命之永不、懼凋落之無期、故具列時人官號・姓名・年紀、又寫詩著後。後之好事者、其覽之哉。凡三十人、吳王師・議郎關中侯・始平武功蘇紹、字世嗣、年五十、爲首。」

石崇の金谷詩の敘にいう、「私は元康六年（二九六）、太僕卿から地方へ出て使持節となり、青州・徐州諸軍事、征虜將軍になった。河南の縣境の金谷澗に別荘があり、起伏

うたげのうた（川合）

が多く、泉水や樹林、多種の果樹や竹柏、藥草のたぐいなどがあって、そろわない物はなかった。さらに水車、魚池、洞窟があり、目を樂しませ心を喜ばせる物が完備していた。その時、征西大將軍祭酒の王詡が長安に歸るのに當たり、私は賢者たちとともに見送りに澗中に行き、晝も夜も宴會を催して、何度も席を移した。小高い山に登って下を見下ろしたり、水際に並んで坐ったりした。その時、琴瑟笙筑の樂器を、車の中に一緒に載せて、道みち演奏した。行くと、鼓吹の樂器と代わる代わる演奏させた。そこで各々詩を賦して、胸中の思いを述べた。詩ができない者があれば、三斗の酒を罰とした。命が永遠に續くものではないことに感慨をもよおし、いつ朽ち果てるとも分からぬさだめに心を痛め、そこでその時の官職や名前、年齢を列記して、それも詩を書いて後につけた。後の世の好事家たちが、これを見ることだろう。全部で三十人、吳王師・議郎關中侯・始平武功の蘇紹、字世嗣、年五十、を卷首とする」。

「凡そ三十人」という參列者の詩の中で完全に見られるのは『文選』卷二十に載せられた潘岳の一首のみで、ほか

に杜育の詩の斷片が『文選』李善注(卷三〇、謝靈運「南樓中望所遲客」詩注「杜育金谷詩曰、……」に引かれているに過ぎない。それも「既にして慨爾たり、此の離析に感ず」の二句だけでは、離別の詩であることは分かるが、この送別の宴のものとも斷定できない。潘岳の詩「金谷に集える作」も『文選』の「祖餞」、すなわち送別の詩の部類に收められているもので、初めの二句は國の中樞を補佐する王氏、海濱の地を治める石氏、と唱い起こしている。

王生和鼎實 王生 鼎實を和え

石子鎮海沂 石子 海沂に鎮す

これは石崇の序に説明されている王詡が長安に赴き、石崇が青・徐に出る狀況と一致するから、金谷における同一の送別の宴の作とみなすことができる。潘岳の詩全體は金谷園の景觀を述べ、「但だ戀う 杯の行くことの遲きを」といった宴席を盛り上げる決まり文句(王粲の「公讌詩」にも「但戀孟行遲」の句がある)を含みながらも、友愛の思いと離別の情を綴っている。

石崇の「序」は『世說新語』品藻篇の注に引かれたもの

が最も長いが、ほかにも逸文がいくつか見られ、對校してみると、品藻篇注にない語句も多少混じっていることから、それが必ずしも完全なテキストでないことが分かるが、ただ「性命の永からざるに感じ、凋落の期無きを懼る」という悲觀のことばは、ここにしか見られない。

石崇の宴の場合は、石崇自身と王詡、二人の送別の宴であつたということが、饗宴の席において今という愉悅の時がはかなく過ぎていってしまう思いをいつそう驅り立てたとも考えられるが、宴の主催者石崇が宴のさなかにおいて悲嘆の言辭を吐いているのは確かである。

金谷園が地形も植物も豊かで庭園として完全無缺のものであることを綴り、そこで催された宴會が贅を極めたものであることを述べてきたあとに、いきなり「感性命之不永懼凋落之無期」の二句があらわれるのは、いささか唐突な印象を否めない。ここに省約がなく、もともと出し抜けない感じが伴うものであるとすれば、それは主催者が人の生の短さを嘆くことがすでに一つの様式として定着していたからこそであらう。

石崇の「序」には、先に擧げた曹丕の場合には見られなかった要素が加わっている。すなわち今行われている饗宴に参加者それぞれが賦した詩、主催者石崇がそれらを統べた「序」、そうしてまとめられたものが後世の人に見られるであろうということを、今の時点から予期しているところである。言い換えれば現在を將來が過去として振り返るだろうと現在において予期する。そのために参加者の「官號、姓名、年紀」を逐一記録しておくという。今、自分たちが享受している饗宴の愉悅、それを人間の歴史の中に位置づけようとするのである。これは生命の有限に思いを致す感慨とつながっている。今の幸福な時間ははかない人の命の中の一時に過ぎない。宴はほどなく果て、そして我々はこの世から消えていく。しかし我々がこうした時間をもったことを記録しておくことによって、後の人々が思い出してくれることだろう。こうした思いを抱くことによって、今の饗宴が單なる一時の享樂でなく、この世に繰り返し生まれては死んでいく人々に共有される普遍的な意味を備えることになる。

うたげのうた(川合)

宴をあとから振り返ってそこに感慨を生じるというのは、實は曹丕にもある。曹丕の公議にまつわる詩自體には見えないが、そこに參集した文人たちが死去したあとで、曹丕は彼らと集い合った日々の、失われた幸福を懐かしさと悲しみをこめて回想している。阮瑀が亡くなったあとに「朝歌令吳質に與うる書」(『文選』卷四二)のなかで、さらに「徐(幹)・陳(琳)・應(瑒)・劉(楨) 一時に俱に逝」った翌年にも「吳質に與うる書」(同)のなかで、失われた昔日の遊を追憶している。前者では當時の饗宴の様子を美しく記したあと、

樂往哀來、愴然傷懷。余顧而言、斯樂難常。足下之徒、咸以爲然。今果分別、各在一方。元瑜長逝、化爲異物。每一念至、何時可言。

樂しみが去って悲しみが生じ、悲痛が胸に迫りました。私は振り返っていいました、「この樂しみはいつまでも續くものではない」と。君たちも、みなそれに同感しました。今果たして散り散りになり、それぞれが別の所にいます。元瑜(阮瑀)は歸らぬ人となり、異物に化してしまいました。

た。その思いが浮かぶたびに、いつかお話したいと思っていました。

後者ではやはり當時の交遊の親密さを述べたあと、

當此之時、忽然不自知樂也。謂百年已分、可長共相保。何圖數年之間、零落略盡、言之傷心。

その當時には、ついうかうかとして楽しさに気づきませんでした。人間百年の壽命は我がもので、みないつまでも保つことができるとはかり信じ込んでおりました。數年の間に、ほとんどの人々が死んでしまおうとは、だれが予想しましょう。口に出すだに心が痛みます。(興膳宏氏の譯による)

當時の心境を語る二つの書翰が矛盾するわけではない。

曹丕の胸を激しく揺すっているのは、ともに集い合った幸福な時間が實にあっけなく失われてしまった驚きである。

曹丕の場合は實際に二度と繰り返せなくなった饗宴を本人みずから回顧しているものだが、石崇の「序」は饗宴の現在において、それが將來の人々から回想されることを予想し、過去として消え行くであろう自分たちの身を悲しむの

である。

### 三 王羲之「蘭亭序」

石崇「金谷詩序」が書かれた「元康六年」(二九六)から半世紀あまりのちに、「永和九年」(三五三)と本文に記された王羲之の「蘭亭序」が登場する。あまりにも名高いこの「蘭亭序」をめぐるのは、古來様々な議論が交わされてきた。最近では清水凱夫氏が「王羲之『蘭亭序』不入選問題の検討」と題する論文の中で、これまでの研究史を詳細に紹介しながら検討を加え、結論として、通行する「蘭亭序」は唐初に編まれた『晉書』に初めて出現するもので、梁の時代に見られたのは『世說新語』劉孝標注が引く「臨河序」であり、それには「君臣の正しい在り方を追求する『沈思』」が缺如していることが『文選』に採られなかった理由であろうという。清水氏の論文は「蘭亭序」がなぜ『文選』に收められなかったのかという問題を掘り下げたものだが、ここではその問題に関わるつもりはない。また、王羲之の手になるか否かという点についても、直接の關心と

しようと思わない。今、確認したいのは、饗宴を詠じた詩群を統べる「序」の中に、人生の短さを嘆くことばが含まれているということである。

「永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、會稽山陰の蘭亭に會し、禊事を修むる也」と、宴の開かれた時・場所から書き始め、さらに蘭亭を取り巻く地形、そこで催された曲水の宴のありさまを綴っていく。天氣にも恵まれ、饗宴の喜びを満喫していることを記して、「信に樂しむべき也」と結んだあと、一轉、悲觀のことばが始まる。

夫人之相與俯仰一世、或取諸懷抱、悟言一室之内、或因寄所託、放浪形骸之外。雖趣舍萬殊、靜躁不同、當其欣於所遇、暫得於己、快然自足、不知老之將至。及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣。向之所欣、俛仰之間、已爲陳跡、猶不能不以之興懷。況修短隨化、終期於盡。古人云、死生亦大矣、豈不痛哉。

每覽昔人興感之由、若合一契、未嘗不臨文嗟悼、不能喻之於懷。固知一死生爲虛誕、齊彭殤爲妄作。後之視今、亦猶今之視昔、悲夫。故列敘時人、錄其所述、雖世殊事異、

うたげのうた（川合）

所以興懷、其致一也。後之覽者、亦將有感於斯文。

いったい人みなが一生を送るにあたって、胸中の感懷を一室のなかでひそやかにかたることもあれば、志のおもむくまま自由奔放にふるまうこともある。このように人間の生きかたは實に靜動さまざまであるが、しかしだしも境遇のよるこばしく得意なときには、しばしそこに満ちたりて、老境がわが身をおとずれようとしていることにさへ氣がつかないでいる。やがて得意が倦怠にかわり、感情がうつろいゆくと、それにつれてやるせない感懷がこみあげてくる。ついでにまたよろこびであったものが、つかのまにもはや過去のものとなつてしまつて、ただこれしきのことにすら人間の心は動かされずにはおられないのである。ましてや人間の生命は長い短いのちがいこそあれ、けつきよくは盡きることを約束されている。古人は、「死生もまた大なり——死生こそ一大問題だ」といつているが、いたましいかぎりではないか。古人の感懷をもよおした理由が現在の自分とおなじなのを讀むたびに、わたしは書物をまえにして胸はうずき、わけもなく悲しくてたまらなく

なる。わたしは、「死と生を」とし、彭と殤を齊しくする——死と生あるいは長壽者と夭折者を同一視する」莊子の哲學を、でたらめですつばちだをつくづく思う。後世の人たちが現在のわたしたちをかえりみるのも、ちょうどわたしたちがいまの時點から過去をふりかえるのとおなじことであろう。悲しいことだ。ゆえに參集した人たちの名を列舉し、その作品を收録する。世はうつり事はかわろうとも、感動をもよおす源はけっきよくひとつであり、後世の讀者たちもきつとこれらの作品に感動するにちがいない。

(吉川忠夫氏の譯による)

石崇の「金谷詩序」ではわずか二句が述べていた人生短促の嘆きが、ここでは後半のすべてを占め、宴の樂しさを綴った前半を上回る字數が費やされている。石崇の場合は悲嘆のことが唐突な印象を與えたのに對して、ここでは宴という樂しい機會を契機として悲しみが生まれることが、文章の中で説明されている。「向の欣ぶ所は、俛仰の間に、已に陳跡と爲るも、猶之を以て懷いを興さざる能わず。況や修短化に隨い、終に盡に期するをや」。心から樂しん

だ宴の催しがたちまち過去のことになつてしまふ。そこにも感慨が生じるのだから、まして人の命の有限を思えば心を痛めないわけにいかないと、生の中の一つの事柄から自然に連續して人生全體へと思いが廣がるのである。

悲嘆の辭が繰り廣げられていることは、郭沫若が偽作説の根據の一つとして掲げるものである。この宴で作られた王羲之の詩の方には集いの樂しい氣分しか唱われていないのとは一致しない、王羲之の人間像の剛毅な氣性とそぐわない、そうした作品外部との關係のみならず、作品の内部においてもこの悲觀の部分とはつてつたように不整合をきたしているという。それに對して興膳宏氏は、詩と序とは一つの心情に統一されている必要はなく、詩で樂しみを唱つても序を記す段に至つて悲哀の念が生じて不思議ではないと、それぞれを王羲之のその時々々の眞情を表白したものとする。

「宴果ててのち、過ぎ去つた樂しい時間を回顧しながら序の筆を執つたとき、あるいは流れゆく時間の一コマとしてこの樂しかった集いの意味を見つめなおしたとき、彼の

心情に微妙なかげろいがさしたとしても、それは少しも不思議ではない。それはいわば快樂をふちどる哀情である。

……」<sup>24</sup>

また吉川忠夫氏も王羲之の思想の總體の中に位置づけて「結論していえば、後世の増益とされる部分は、羲之の思想全體のコンテキストのなかでけっして違和感はない」という。

兩氏が悲嘆の辭の表出を王羲之の心情なり思想なりと結びつけて、そこに不自然さはないことを説かれたものとすると、小南一郎氏は作品の書かれた場を重視して、こう述べる。

「一本調子に楽しみを述べるのではなく、それに陰翳を與えるというのが遊びの表現の一つの様式であったのではなからうか。そしてその陰翳を與える仕事はまずその場の主人である王羲之の役目であつたはずである。」

「うたげのうた」という系譜を建安の公讌詩からたどってここに至れば、樂しかるべき饗宴のさなかにあつて主催者が束の間に移ろいゆく人生の縮圖をそこにみて悲嘆する

うたげのうた（川倉）

のは、不自然でないというより、ほとんど定型といつていほどに定着したかたちだったのではないか。

しかしながら、建安の公讌詩の場合には、樂しみを述べことほぎを呈する客人と悲觀のことばを發する主人、というように主客の役割が截然と分かれていたのだが、蘭亭の集いはどうか。王羲之の宴席で作られたと思われる詩は相當な數がのこっている。郭沫若が「序」とすぐわなわなとした王羲之自身の二篇の詩、その五言の詩は次のように唱われている。

仰眺碧天際　仰ぎて碧天の際を眺め

俯瞰綠水濱　俯して綠水の濱を瞰る

寥朗無涯觀　寥朗たり　涯まり無き觀め

寓目理自陳　寓目　理は自ずから陳なる

大矣造化功　大なるかな　造化の功

萬殊靡不均　萬殊　均しからざる靡し

群籟雖參差　群籟　參差たりと雖も

適我無非親　我に適いて親しきに非ざる無し

空の果て、水の果てまで、目の届く限りを眺める。森羅



萬象は現象としては無數に異なりながらも、世界全體が一つの「理」によって統一されている。様々な物から發せられる音は多様であつても、すべてが自分に快く響き、自分も世界の調和の中に溶け込んでいる。——ここにあらわれた感情はといえば、確かに郭沫若がいったとおり、春の顯現を喜んでいるということになるのだろうが、しかしそれだけ摘み出してしまうと、詩全體の情感を捉え損なつてしまう。萬物の春、世界の調和をまのあたりにして、詩人は謙虛に、懼れ謹んでそれを見ているかのようだ。そこには世界に對する畏怖、己れの卑小さへの自覺が隣り合はせてなっている。吉川忠夫氏が「五言詩はたんなる樂觀であらうか。『大いなる造化の功』は、微少にして不安定な人間存在との對比のもとにうたわれているのではないか」というのに與したく思う。世界との一體感こそが束の間のものであるという認識の上に享受されているのである。

四言の詩にはいふ、

代謝鱗次 代謝は鱗のごとく次ぎ

忽焉以周 忽焉として以て周る

欣此暮春 此の暮春を欣び

和氣載柔 和氣 載ち柔らぐ

詠彼舞雩 彼の舞雩を詠ぜしは

異世同流 世を異にするも流れを同じくす

乃攜齊契 乃ち齊契を攜え

散懷一丘 懷いを一丘に散ず

これも中心となる感情を抽出すれば春の喜び、そこに集う樂しみということになつてしまふが、その春を、次々と移り變わる季節の周期の中で巡つてきたものと捉える態度は、この幸福な季節もまた束の間のうちに過ぎ去つてしまふという感懷に連なる。そしてまた、春は周期的に巡つてくるのに、それを享受する人は線狀の時間軸の中で次々生起し消滅するという對比が「舞雩」への言及から生じる。それは「序」の末尾近くにいるところの、今の歡樂も未來の人にとっては過去のものとして回想されるであらうという思いにつながるものである。現在の饗宴が未來の人々にとって過去のものとして回顧されるという發想は、石崇「金谷詩序」にも「後の好事の者、其れ之を覽ん哉」と、

二句に記されていたものであるが、「蘭亭序」ではそれを敷衍して抒情を深めている。

參會者の詩もおおむねこうした唱いぶりといっているが、ことに庾蘊の作は「やや暗い色調を帯びる」。

仰想虛舟說 仰ぎて虛舟の説を想い

俯歎世上賓 俯して世上の賓を歎ず

朝榮雖云榮 朝榮 榮しと云うと雖も

夕弊理自因 夕弊 理自ずから因る

『莊子』山木篇にいう「虚舟」、波間に漂う無人の舟さながら、定め無き生。世の人々もそれから免れない。朝の開花を喜んだところで、夕べに萎れることに歸結するのが必然の理というもの。この斷片とおぼしい四句の前後にどのような詩が展開されていたかわからないが、少なくともこの部分から推せば饗宴の楽しさよりもそれをはなく消滅していくものとして捉えていることは確かである。宴に招かれた建安詩人たちが公讌の中で宗教的といっているような至福感、陶醉感を唱っていたのと較べてみれば、蘭亭の宴の參加者たちは饗宴の楽しさというにしてもいかに醒

うたげのうた（川合）

めているといわねばならない。そこにはすでに主客の對比的構造は消滅している。參列者たちも手放しで盛會を讃えたり喜んだりしていないのである。

參會者たちがすでに主催者を讃え祝福することをしなくなり、主客の隔てが薄れていったのはなぜか。一つは建安の公讌詩の場合には、主催者が曹操であれ曹丕であれ、參列者にとっては忠誠を捧げるべき主君であつたという主従關係が強く作用していたのが、蘭亭の會に集つた人々の間ではもはやそうした強固な支配―被支配關係がなかつたことであろう。そしてまた建安公讌詩の時代には、うたげというものがまだ古代の呪術的要素を帯び、ことほぎを捧げるべき特別な時空であつたのから、より文學的な場へと變質していたためでもあろう。もちろん三月三日に催されることは多少の宗教性を帯びていたにしても、それはすいぶん遠のき、社交の場として、文學の場としての意味が重くなって、人々は春の饗宴に加わって、それを生の中の重要な一コマとして享受しながら、人生全體、人類の歴史全體の中に位置づけて感慨を深める機會となつていたのである。

のちに鍾嶸『詩品』序が擧げる詩作の場の一つ、「嘉會には詩を寄せて以て親しむ」、うたげのうたもそうした社交と文學の機會として定着していくのである。

#### 四 その後の展開

饗宴の最中にそれを長い時間の中のわずかなひとときであるともなして人生の短さを嘆くというモチーフは、降って初唐・王勃の「滕王閣の序」及びその詩にも認めることができる。「秋日 洪府の滕王閣に登りて餞別するの序」には、「天高く地迴よまかにして、宇宙の窮まり無きを覺え、興盡き悲しみ來たりて、盈虚の數有るを識る」、また「嗚呼、勝地は常ならず、盛筵も再びし難し。蘭亭は已やぬ、梓澤（金谷園の別名）も丘墟となりぬ」とある。金谷、蘭亭の宴の系譜に連なることはこのように明言されている。七言八句の「滕王閣の歌（同）」の後半四句を引けば、

閑雲潭影日悠悠 閑雲 潭影 日びに悠悠たり  
物換星移度幾秋 物換わり星移りて幾秋をか度る  
閣中帝子今何在 閣中の帝子 今何いづこにか在る

欄外長江空自流 欄外の長江 空しく自ずから流る  
自然の無限と人間の有限とが對比されている。

さらに降って、これは松本肇氏から教示を受けて思い出したものだが、李白の「春夜 従弟の桃花園に宴する序」を擧げなくてはならない。

夫天地者、萬物之逆旅也。光陰者、百代之過客也。而浮生若夢、爲歡幾何。古人秉燭夜遊、良有以也。況陽春召我以烟景、大塊假我以文章。會桃花之芳園、序天倫之樂事。羣季俊秀、皆爲惠連、吾人詠歌、獨慙康樂。幽賞未已、高談轉清。開瓊筵以坐花、飛羽觴而醉月。不有佳詠、何伸雅懷。如詩不成、罰依金谷酒斗數。

そもそも世界とは、萬物の假りの宿である。時間とは、永遠の旅人である。そして人の一生は夢のようなもので、喜ばしい時などいくばくもない。古人が燭を手に夜まで遊んだというのも、まことにもっともなことだ。ましてや春はかすむ景色で私を招き、天地は文學の才を私に與えてくれている。桃の花咲くかぐわしい庭園に集い、兄弟集い合う楽しい催しを述べる。弟たちはこぞって俊英ぞろい、い

ずれも謝惠連のごとくであるが、私だけは歌を詠しても、謝靈運になれないのが恥ずかしい。風景の賞玩はなおも續き、優雅な談笑はいよいよ清らかとなる。玉の敷物を廣げて花の中に坐り、羽のかたちの觴を飛ばして月光の中に酔う。美しい詩でなければ、胸中の美しい思いを繰り廣げられない。もし詩が作れなければ、罰杯はかの金谷園の宴の數に合わせる。

もちろん罰杯の數だけでなく、宴そのものを、また宴の捉え方を金谷園の饗宴になぞらえている。冒頭で人の生のはかなさを確認したうえで、今開かれている宴席の快樂を存分に楽しもうというのである。李白のこの「序」は『古文眞寶』に收められて日本では人口に膾炙しているものの、中國ではさほどでないようで、その陳腐さを指摘する批評もある。

これ以後、宴席の中で人生短促を嘆く措辭は、少なくとも時代を代表するような作品からは消えていくように思われる。李白の「序」が凡庸さを批判されるというのは、もはやうたげのうたの系譜もここで盡き、文學としての生命

うたげのうた（川合）

を失ったものだろうか。

宴のさなかにあつて悲哀の思いを綴るといえば、たとえば杜甫の「九日 藍田 崔氏の莊」詩がそうである。しかしながらそこにはもはやここまで見てきたような抒情の類型とはまるで異質の、この作者ならではの悲しみが唱われている。

老去悲秋強自寬 老い去き秋を悲しみて強いて自から寛うす

興來今日盡君歡 興來たりて 今日 君の歡びを盡くす

羞將短髮還吹帽 羞ずらくは短髮を將て還お帽を吹かるるを

笑倩旁人爲正冠 笑いて旁人に倩いて爲に冠を正さしむ

藍水遠從千澗落 藍水は遠く千澗從り落ち

玉山高並兩峰寒 玉山は高く兩峰を並べて寒し

明年此會知誰健 明年 此の會 知んぬ誰か健なるかを

醉把茱萸子細看 醉いて茱萸を把りて子細に看る

李白の宴が春であつたのに對して、ここではもとより悲しみの季節である秋の重陽の宴である。秋の悲しみは衰老の悲しみと重なり合う。舞臺は定型の悲哀を用意するが、しかしそのなかで無理にでも自分の氣持ちをくつろがせ、せめて今日の宴席は存分に愉快に過ごそうとするものの、座に溶け込むこともできずにいる老殘の詩人の形象が新しい。髪が薄くなった頭から帽子は吹き飛ばされ、照れ笑いを浮かべながら、隣に坐り合つた、おそらくはこの席で初めて顔を合わせた人に頼んで直してもらふ姿はなんともぶざまである。そうしたぶざまな自畫像を、苦い自虐とともに描き出す。このように細部を殘酷なまでにありありと描き出す筆致が、定型の保證する安定とは別の詩的世界を創り出している。

長壽を祈るはずの重陽の宴で杜甫は「明年此會知誰健」などと不吉なことを發する。饗宴の中にあつて宴がはかなく終わり、我々の生も盡きて、やがて過去の出來事として追憶されるだろうという詠嘆は、うたげのうたに定着し

ていたものであつたが、しかし杜甫がここで來年の會にはこの内の誰が健在でいられることかとつぶやくのには、類型化した抒情にはない、生々しさがある。

杜甫の「九日」の詩が、宴の中で抱く悲哀という點では因襲に連なりながらも、集團的な抒情性から個人の感情の詩化へとすっかり變貌していたのに對して、蘇軾の「赤壁の賦」は新しい世界觀を加えることによって類型的なリズムを乗り越えている。「赤壁の賦」は、ここまで見えてきた詩がすべて實際に催された饗宴の席上で作られていたのと異なつて、文學として設定された酒宴であるが、これも「樂しみ去りて悲しみ來たる」のモチーフに連なるものである。「是に於て酒を飲みて樂しむこと甚だし」、その最中に「吾が生の須臾なるを哀しみ、長江の窮まり無きを羨む」詠嘆を發しているのは主人公「蘇子」ではなく、相手役の「客」である。この賦がもしそこで終わつていたら手垢のついた抒情の繰り返しに過ぎないだろう。蘇軾はそれに對して人間を流轉から免れないものと認めた上でそれを肯定に轉ずる新たな哲學を展開し、このモチーフに新しい

生命を吹き込んでゐるのである。「客も亦た夫の水と月とを知るか。逝く者は斯の如くなるも、未だ嘗て往かざる也。盈虚する者は彼の如くなるも、卒に消長する莫き也。蓋し將た其の變ずる者自りして之を觀れば、則ち天地も曾ち以て一瞬なること能わず。其の變ぜざる者自りして之を觀れば、則ち物と我と皆盡くる無き也。而るに又た何をか羨まんや。……」水は流れ去る。しかし流れ続ける。月は滿ち缺ける。しかしそれを反復する。變化を過ぎ去って消えゆくものとすれば悲哀が生じるが、變化しつつ永遠に持續するものとみることできる。人も一人の生ははかなく消えていくものだが、人間全體で見れば次々と新しい生命が誕生する永遠の持續ともいえるのだ、と。

うたげのうたの系譜も、「赤壁の賦」の水の流れや月の盈虚と同じように、時代ごとに消長を繰り返し變容しながら、中國の文學の傳統の中で流れ續けたのである。

注

- (1) 陳良運『中國詩學體系論』（一九九二、中國社會科學出版社）八四頁に引かれた馮契「中國近代美學關於意境理論的檢

うたげのうた（川合）

討」では、中國の藝術は「言志」を、西洋の藝術は「模倣」を根幹とするという對比を指摘しているというが、この對比は「情」と「景」という中國の詩學で傳統的に用いられてきた用語に置き換えることができる。

- (2) 范晔文「對牀夜語」（『歷代詩話續編』、一九八三、中華書局、所收）卷一、「子建公讌詩云、清夜遊西園、飛蓋相追隨。明月澄清景、列宿正參差。秋蘭被長坂、朱華冒綠池。潛魚躍清波、好鳥鳴高枝。讀之猶想見其景也」。

- (3) 同上、「是時劉公幹王仲宣亦有詩。劉云、月出照園中、珍木鬱蒼蒼、清川過石渠、流波爲魚防、芙蓉散其華、菡萏溢金塘、靈鳥宿水裔、仁獸遊飛梁。王云、涼風撒蒸暑、清雲却炎暉、高會君子堂、並坐蔭華榭、嘉肴充圓方、旨酒盈金甕、管絃發徽音、曲度清且悲。皆直寫其事、今人雖畢力竭思、不能到也」。

- (4) 葛曉音『山水田園詩派研究』（一九九三、遼寧大學出版社）一三頁。

- (5) 詩題以外に見える「公讌（『公宴』）」の語の用例は、伊藤正文「曹植詩補注稿（詩之一）」（『神戸大學文學部紀要』第八號、一九八一）に挙げられている。

- (6) 「公讌」の意味について李善は語っていない。五臣注では曹植「公讌詩」の題下に「濟曰、公讌者、臣下在公家侍讌也」という。また王粲「公讌詩」の題下では「銑曰、此侍曹操。時操未爲天子、故云公讌」とある。伊藤氏前掲論文では用例

を掲げたあと、「考此諸例、『公宴（讌）』、屬公卿設宴者可知也」という。

- (7) 曹植「公讌詩」の「公子」に李善が「公子謂文帝。時武帝在。謂五官中郎也」とあるのをはじめとして、曹丕を指すことに異説はない。

- (8) 王先謙『詩三家義集疏』（一九八七、中華書局）卷二一、「案、禮中庸引詩云、鳶飛戾天、魚躍于淵。鄭注、言聖人之德、至于天則鳶飛戾天、至于地則魚躍于淵。是其明著于天地也。此言道被飛潛、萬物得所之象、與箋詩義異」。

- (9) 同上、「魯退作胡者、潛夫論德化篇、……詩云、鳶飛戾天、魚躍于淵。愷悌君子、胡不作人。君子修其樂易之德、上及飛鳥、下及淵魚、罔不懽忻悅豫、又況士庶而不仁者乎。退不作胡不、足證傳箋隨文解釋之非」。

- (10) 加納喜光『詩經』（一九八三、學習研究社）下、三四〇頁。

- (11) 伊藤氏前掲「曹植詩補注稿」のほか、「曹丕詩補注稿（詩・闕文・遺句）」（『神戸大學教養部紀要 論集』二五號、一九八〇）など。

- (12) 黃節『曹子建詩注』卷一（一九五七、人民文學出版社）

- (13) 注(2)(3)参照。

- (14) 但し曹丕とする説もある。吳淇『六朝選詩定論』に「此亦侍文帝讌。舊注爲武帝、誤矣」（郁賢皓・張采氏『建安七子詩箋注』、一九八八、巴蜀書社、七六頁、評箋所引）。

- (15) 伊藤氏前掲「曹丕詩補注稿」に「據諸書所云、『芙蓉池』

當在于『西園』、『西園』乃『銅爵園』之別稱也。此篇、蓋丕爲太子之時作、與曹植『公讌』・劉楨『公讌』・王粲『雜詩』等諸篇、略同時而作歟」。

- (16) 李善注は一、二句の下に石崇「金谷詩序」を引く。

- (17) 石崇「金谷詩序」の逸文は以下のとおり。

「世說新語」容止篇、劉孝標注、「石崇金谷詩敘曰、王詡、字季胤、琅邪人」。

「水經注」穀水注、「石季倫金谷詩集敘曰、余以元康七年、從太僕卿出爲征虜將軍。有別廬在河南界金谷澗中、有清泉茂樹、衆果竹柏、藥草蔽翳」。

「藝文類聚」卷九、水部、澗、「石崇金谷序曰、余有別廬、在河南界金谷澗中。或高或下、有清泉茂樹、衆果竹木草藥之屬」。

「文選」卷一六、江淹「別賦」李善注、「石崇金谷詩序曰、余元康六年、從太僕卿出爲使持節、青・徐諸軍事・征虜將軍。有別廬在河內縣金谷澗中。時征西將軍祭酒王詡當還長安、余與衆賢共送澗中」。

「文選」卷二〇、潘岳「金谷集作詩」李善注、「石崇金谷詩序曰、余以元康六年、從太僕卿出爲使持節、監青・徐諸軍事。有別廬在河南縣界金谷澗。時征西大將軍祭酒王詡當還長安。余與衆賢共送澗中。賦詩以敘中懷」。

「太平御覽」卷九一九、羽族部、鴨、「石崇金谷詩序曰、吾有廬在河南金谷中、去城十里、有田十頃、羊二百口、鷄猪鵝鴨之屬、莫不畢備」。

『太平御覽』卷九六四、果部、果、「石崇金谷詩序曰、雜果幾乎萬株」。

(18) 陸侃如『中古文學繫年』はこの書翰を建安二〇（二一五）年にかける。なお陸氏によれば、吳質はすでに朝歌から元城に移っているのので、「朝歌令」と題するのは誤りだという。

(19) 『三國志』魏書、卷二一、王粲傳の注に、「魏略曰、……（建安）二十三年、太子又與賈書曰」としてこの書翰が引かれる。

(20) 『鑑賞中國の古典 文選』（一九八八、角川書店、二九八頁）。

(21) 『學林』第二〇號、一九九四。この論文の中國語譯は『清水凱夫《詩品》《文選》論文集』（一九九五、首都師範大學出版社）に見える。

(22) 吉川忠夫『王羲之——六朝貴族の世界』（一九七二、清水書院）、一九八四、清水新書版四八頁。

(23) 郭沫若「由王謝墓誌的出土論蘭亭序的眞偽」（『文物』一九六五年第六期）

(24) 興膳宏「蘭亭と蘭亭序」（『王羲之書蹟大系解題篇』一九八二、東京美術）

(25) 吉川氏前掲書六一頁。

(26) 小南一郎「蘭亭論争をめぐる」（『書論』三號、一九七三）。この論文は幸福香織氏から教えられて讀むことができた。

(27) 宋・桑世昌「蘭亭效」（『知不足齋叢書』所收）卷一に據る。

うたげのうた（川合）

(28) 吉川氏前掲書六一頁。

(29) 興膳氏前掲論文二二八頁。

(30) 三月三日の宴を唱った詩については、釜谷武志「三月三日の詩——兩晉詩の一側面——」（『神戸大學文學部紀要』第二二號、一九九五）を参照。

(31) 『文苑英華』卷三四三、歌行、所收に據る。

(32) 安旗主編『李白全集編年注釋』（一九九〇、巴蜀書社、一九〇七頁）に引く明・王志堅『四六法海』に「太白文蕭散流麗、乃詩之餘。然有一種腔調、易啓人厭、如陽春・大塊等語、殆令人聞之欲吐矣。陸務觀亦言其識度甚淺」。